

平成 26 年度 大学コンソーシアムあきた 学際的プロジェクト研究報告書

県内学生のコミュニケーションの特徴、苦手意識
及びその克服に関する調査研究

秋田県立大学

総合科学教育研究センター 准教授 渡部 昌平

秋田大学

教育推進総合センター 特任教授 菅原 良

教育文化学部 准教授 小池 孝範

(研究協力者)

聖園学園短期大学 講師 藤原法生

※謝辞：本研究は大学コンソーシアムあきたの研究助成を受けたものです。

背景・目的

人間関係形成に課題や不安を感じる学生は多く、教職員も不安視している。例えば、堀井(2002)では大学生の「集団に溶け込めない不安」について述べているほか、岡田(1995)では青年の対人関係の特徴として「自分の内面を開示することを避け、互いに傷つけたり傷つくことを非常に恐れる」「形だけの円滑な関係を求める傾向がある」と指摘している。また、学校への不適応感などを訴える学生の増加が指摘されており、松島・塩見(2002)はその原因の一つとして対人関係が影響していると述べるなど、学生の対人関係不安への対応は大学としても対応の必要が迫られている。

人間関係に不安を感じ「形だけの円滑な関係」を求める学生がいる一方で、大学間交流など衝突を恐れず積極的に外部とコミュニケーションする学生もいる。この差はいったいどこから生じてくるのだろうか。秋田県出身の学生とそうでない学生の間には何らかの違いがあるのだろうか。またコミュニケーションに対する不安感や苦手意識はどういう教育で変容していくのだろうか。

平成25年度の研究では大学間交流を取り上げ、学生は大学間交流のメリットや効果は理解できるものの「距離が遠い」「交流の方法がわからない」「きっかけがない」等の環境要因を主な理由として大学間交流を行っていないことが分かった。また大学間交流のメリットを明示しても「ぜひ参加したい」という学生は2割程度に留まり、「考えてみる」「友達から誘われれば」という学生が多いことが分かった。

こうした大学間交流のもとともなるコミュニケーションに対する教育は盛んに行われているが、研究のほとんどが実践研究で、「どのような内容が必要か」「なぜその内容か」の意味づけは少ない。そうした中で、山田(2012)は女子学生で発信することに対する自信のなさ、人見知り代表されるコミュニケーションに対する恐れ、自分からの働きかけに対する躊躇等があること、船木・高村(2013)は女子大生で他者の内面まで深く意味を聞き取れないこと、自分の声が相手に与える影響には気づき難いこと、自分の感情を抑えているほうが相手とのつきあいが上手くいくと思いついでいること、自分の重要な話を他者に伝えることを避けていること等を指摘している。また田中・春川(2013)は「回数を重ねるごとに人前で話すことに慣れ、最後にはとても好きになっていた」「自分に自信が持てるようになった」等の反応を報告し、大和(2010)も「繰り返し訓練していくことによって、苦手とする人前での発表やプレゼンテーションも上達」すると報告するなど、「自信のなさ」に対して実践(繰り返し)が効果があることが示唆されている。

そこで今年度の本研究では、コミュニケーションそのもの(に対する自信)に焦点を当て、秋田市内の3大学・短期大学の協力を得て、秋田出身・秋田以外の東北出身・それ以外の出身の3区分に分けてコミュニケーションの自信に違いがあるか否か、また昨年度に作成した大学間交流の尺度を関東圏の大学に

実施して県内学生と違いがあるか否か、さらにコミュニケーション教育によりコミュニケーションへの自信にどんな変化があるのかについて調査研究することとした。

方法

(1) 出身地による比較調査

秋田市内のA大学、B大学、C短期大学において2014年9月～11月に質問紙調査を実施した。質問紙は渡部(2014)及びB大学における教養科目「コミュニケーション入門」受講者の声を踏まえて作成した。内容は考え方・態度・行動として「初めて話す人とも、仲良くなれる」「たくさんの人と話したい」と思う」「大人数(グループ)でも遠慮せずに会話できる」「自分のコミュニケーションのあり方について、考えている」など学生が苦手としやすい17項目と、「コミュニケーション能力全般」「人の話をちゃんと聞くこと」「人に自分の意見や考えを説明すること」「人と「話のやりとり」をすること」への自信4項目の合計21項目である。考え方・態度・行動は「全くあてはまらない(1)」～「よくあてはまる(5)」までの5件法、自信は「自信がない(1)」～「自信がある(5)」までの五件法で回答してもらった。

A大学では97名(うち1年生85名4年生12名)、B大学では151名(全て1年生)、C短期大学では222名(うち1年生109名2年生113名)の回答を得た。

(2) 大学設置地域による比較調査

菅原・渡部(2014)が作成した「学生による大学間交流尺度」を2014年1月～9月に関東圏の6大学の文系学部学生に対して実施した。D大学118名、E大学17名、F大学89名、G大学83名、H大学64名の452名から回答を得た。

これら結果を因子分析し、菅原・渡部(2014)の県内大学・短期大学の結果と比較することとした。

(3) コミュニケーション教育による変化の調査

B大学の教養科目「コミュニケーション入門」の第1回、第11回、第15回において(1)と同じ質問紙調査を行った。(第1回目は(1)で用いたデータと同じものである。)第1回は151名、第11回は142名、第15回は105名(全て1年生)から回答を得た。

なお「コミュニケーション入門」の内容は第1回～第8回までが自己理解と他者理解を中心に解説し、第9回～第11回がグループワーク・グループディスカッション、第12回はグループでブレインストーミングをして個人個人がグループ内でプレゼンをし、第13回は全員の前でグループでプレゼン内容を発表、第14回はグループでこれまでの講義を振り返り、第15回は全員の前で1人1人が発表というスタイルであった。また第3回以降、2、3回に1度程度の割合

で席換えをし、毎回グループ内で1人1人が挨拶・自己紹介する時間を取った。またグループワークでは特定の学生に責任や役割が集中しないよう、教員のほうで司会や発表を毎回変えるように指示した。

結果

(1) 出身地による比較調査

各大学・短期大学における結果を以下に示す(表1~表3)。

大学により平均点等に差があるが、概ね

- ・ 秋田出身者やその他の東北・北海道出身者は「自己紹介が苦手」(I-9)で初対面(I-1)などに壁を感じ(I-4)、コミュニケーションに自信がない(II-1)が、話している相手のことを考え(I-14)、表情や態度に気をつけている(I-15)。
- ・ 男性よりも女性のほうがたくさんの人と話したい(I-3)が、コミュニケーションに壁を感じやすい(I-1, 2, 4, 5, 6)。特に人前が苦手(I-10, 11, 12, 13)。男性のほうが話している相手のことを考え(I-14)、表情や態度に気をつけている(I-15)

傾向が見られた。

表1. A大学結果

I 考え方・態度・行動	平均	標準偏差			秋田平均	東北・北海道平均 (秋田除く)	その他平均
			男子平均	女子平均			
1 初めて話す人とも、仲良くなれる。	3.08	1.05	3.25	3.00	3.07	3.16	2.80
2 初めてではないが「友達ではない」人とも緊張せずに会話できる。	3.04	1.12	3.00	3.02	2.97	3.08	3.20
3 「たくさんの人と話したい」と思う。	3.37	1.24	3.44	3.34	3.19	3.72	4.00
4 あまり話したことのない人にも「壁」を感じることはない。	2.36	1.00	2.53	2.28	2.33	2.44	2.40
5 あまり話したことのない異性とも普通に会話できる。	2.51	1.26	2.56	2.48	2.48	2.52	2.80
6 あまり話したことのない年上の人とも普通に会話できる。	3.14	1.19	3.19	3.06	3.03	3.20	3.60
7 「第一印象が悪い人」でも偏見を持たずに会話する。	2.69	1.00	2.59	2.74	2.55	2.92	3.40
8 見た目がチャラチャラした人とも誠意を持って会話をする。	2.92	0.96	2.81	2.97	2.87	2.92	3.60
9 「自分らしい自己紹介」ができる。	2.77	1.14	2.84	2.74	2.73	2.84	3.00
10 必要なときは質問・確認をする。	3.47	1.03	3.50	3.46	3.49	3.44	3.40
11 意見を強く言う人に対しても必要があれば自分の意見を伝える。	3.16	1.04	3.44	3.03	3.13	3.24	3.20
12 大人数(グループ)でも遠慮せずに会話できる。	2.81	1.07	2.94	2.75	2.73	3.00	3.00
13 クラスの前に立って意見を言うことができる。	2.70	1.15	2.91	2.60	2.72	2.80	2.00
14 話している相手のことを考えながら話している。	3.78	0.89	3.69	3.83	3.84	3.60	4.00
15 相手の話を聞くときには、表情や態度に気をつけている。	3.91	0.88	3.53	4.09	3.93	3.88	3.80
16 周りの人のコミュニケーションをよく見ている。	3.76	0.91	3.84	3.66	3.76	3.52	4.20
17 自分のコミュニケーションのあり方について、考えている。	3.56	1.06	3.75	3.46	3.55	3.56	3.60
II コミュニケーションへの自信	平均	標準偏差					
1 コミュニケーション能力全般	2.42	0.96	2.69	2.29	2.36	2.64	2.20
2 人の話をちゃんと聞くこと	3.26	1.12	3.16	3.31	3.28	3.16	3.40
3 人に自分の意見や考えを説明すること	2.69	1.05	3.06	2.51	2.67	2.72	2.80
4 人と「話のやりとり」をすること	2.92	1.02	3.19	2.78	2.88	3.00	3.00

表 2. B 大学結果

I 考え方・態度・行動	平均	標準偏差	男子平均		女子平均		秋田平均	東北・北海道平均 (秋田除く)	その他平均
			男子平均	女子平均	秋田平均	東北・北海道平均 (秋田除く)			
1 初めて話す人とも、仲良くなれる。	2.86	1.02	2.91	2.74	2.84	2.68	2.96		
2 初めてではないが「友達ではない」人とも緊張せずに会話できる。	2.59	1.08	2.73	2.28	2.45	2.68	2.65		
3 「たっくさんの人と話したい」と思う。	3.78	1.04	3.73	3.81	3.88	3.68	3.70		
4 あまり話したことのない人にも「壁」を感じることはない。	2.41	1.02	2.55	2.11	2.33	2.42	2.46		
5 あまり話したことのない異性とも普通に会話できる。	3.18	1.15	3.19	3.09	3.06	3.19	3.22		
6 あまり話したことのない年上の人とも普通に会話できる。	2.95	1.16	3.04	2.74	2.82	3.06	2.99		
7 「第一印象が悪い人」でも偏見を持たずに会話する。	2.60	1.05	2.54	2.74	2.67	2.45	2.62		
8 見た目がチャラチャラした人とも誠意を持って会話をする。	2.93	1.10	2.95	2.89	2.90	2.87	2.99		
9 「自分らしい自己紹介」ができる。	2.62	1.00	2.72	2.38	2.53	2.45	2.75		
10 必要などきは質問・確認をする。	3.30	0.96	3.42	2.96	3.14	3.52	3.28		
11 意見を強く言う人に対しても必要があれば自分の意見を伝える。	3.25	1.01	3.36	3.02	3.31	3.35	3.16		
12 大人数(グループ)でも遠慮せずに会話できる。	2.82	1.05	2.90	2.64	2.86	3.00	2.71		
13 クラスの前に立って意見を言うことができる。	2.42	1.06	2.50	2.23	2.37	2.48	2.42		
14 話している相手のことを考えながら話している。	3.68	0.84	3.73	3.57	3.75	3.74	3.61		
15 相手の話を聞くときには、表情や態度に気を付けている。	3.85	0.84	3.85	3.79	3.90	3.84	3.77		
16 周りの人のコミュニケーションをよく見ている。	3.41	1.03	3.43	3.28	3.47	3.16	3.42		
17 自分のコミュニケーションのあり方について、考えている。	3.39	1.10	3.34	3.51	3.41	3.32	3.41		
II コミュニケーションへの自信			男子平均		女子平均		秋田平均	東北・北海道平均 (秋田除く)	その他平均
1 コミュニケーション能力全般	2.26	0.92	2.29	2.15	2.27	2.00	2.33		
2 人の話をちゃんと聞くこと	3.31	1.05	3.36	3.21	3.47	3.68	3.03		
3 人に自分の意見や考えを説明すること	2.65	0.98	2.76	2.40	2.61	2.77	2.62		
4 人と「話のやりとり」をすること	2.78	0.92	2.89	2.53	2.75	2.87	2.77		

表 3. C 短期大学結果

I 考え方・態度・行動	平均	標準偏差	男子平均		女子平均		秋田平均	東北・北海道平均 (秋田除く)	その他平均
			男子平均	女子平均	秋田平均	東北・北海道平均 (秋田除く)			
1 初めて話す人とも、仲良くなれる。	3.38	1.09	3.75	3.37	3.38	3.33	5.00		
2 初めてではないが「友達ではない」人とも緊張せずに会話できる。	3.18	1.17	3.40	3.14	3.14	3.33	5.00		
3 「たっくさんの人と話したい」と思う。	3.63	1.10	3.07	3.66	3.62	3.33	4.00		
4 あまり話したことのない人にも「壁」を感じることはない。	2.68	1.02	2.73	2.68	2.68	2.33	4.00		
5 あまり話したことのない異性とも普通に会話できる。	2.85	1.18	3.40	2.81	2.84	3.33	2.00		
6 あまり話したことのない年上の人とも普通に会話できる。	3.05	1.18	3.47	3.02	3.06	3.00	2.00		
7 「第一印象が悪い人」でも偏見を持たずに会話する。	3.05	1.02	2.87	3.06	3.05	3.33	2.00		
8 見た目がチャラチャラした人とも誠意を持って会話をする。	3.23	0.97	3.07	3.24	3.23	3.67	2.00		
9 「自分らしい自己紹介」ができる。	2.79	0.98	2.53	2.81	2.79	2.67	3.00		
10 必要などきは質問・確認をする。	3.66	0.94	3.73	3.65	3.67	2.67	4.00		
11 意見を強く言う人に対しても必要があれば自分の意見を伝える。	3.06	1.10	3.53	3.03	3.08	1.67	3.00		
12 大人数(グループ)でも遠慮せずに会話できる。	2.97	1.06	3.20	2.96	2.98	2.00	4.00		
13 クラスの前に立って意見を言うことができる。	2.58	1.06	2.67	2.57	2.59	2.00	3.00		
14 話している相手のことを考えながら話している。	3.92	0.75	3.60	3.94	3.93	3.67	3.00		
15 相手の話を聞くときには、表情や態度に気を付けている。	4.09	0.76	3.93	4.11	4.10	4.33	2.00		
16 周りの人のコミュニケーションをよく見ている。	3.73	1.00	3.60	3.73	3.74	3.33	2.00		
17 自分のコミュニケーションのあり方について、考えている。	3.52	1.01	3.07	3.56	3.54	2.67	2.00		
II コミュニケーションへの自信			男子平均		女子平均		秋田平均	東北・北海道平均 (秋田除く)	その他平均
1 コミュニケーション能力全般	2.60	1.02	2.73	2.59	2.61	2.33	3.00		
2 人の話をちゃんと聞くこと	3.58	0.97	3.20	3.60	3.58	3.67	2.00		
3 人に自分の意見や考えを説明すること	2.67	1.07	2.87	2.65	2.68	1.33	4.00		
4 人と「話のやりとり」をすること	3.07	1.00	3.07	3.07	3.07	3.00	3.00		

(2) 大学設置地域による比較調査

菅原・渡部 (2014) では、第 1 因子：学生の内向き・利己的・打算的な志向に起因する因子、第 2 因子：大学側のサポート不足に起因する因子、第 3 因子：費用と場に起因する因子、第 4 因子：他大学に対する興味関心の不足に関する因子、解釈不能な第 5 因子の 5 つの因子が抽出された。しかし、この調査において抽出された累積寄与率は全体の観測変数に対して 40.39 パーセントにしか過ぎず、学生による大学間交流尺度を十分に確認することができなかった。

表 4. 関東圏大学の因子分析結果

NO.	因子	
	1	2
SIE21	.817	.334
SIE15	.799	.344
SIE14	.774	.385
SIE25	.714	.422
SIE11	.710	.466
SIE19	.707	.441
SIE12	.693	.477
SIE10	.678	.477
SIE4	.677	.434
SIE3	.666	.444
SIE24	.645	.444
SIE6	.643	.568
SIE20	.642	.445
SIE13	.572	.531
SIE22	.570	.485
SIE18	.559	.515
SIE8	.380	.814
SIE27	.382	.812
SIE9	.441	.787
SIE1	.430	.739
SIE16	.441	.723
SIE7	.410	.713
SIE5	.484	.665
SIE17	.390	.613
SIE2	.569	.608
SIE26	.570	.572
SIE23	.569	.571
寄与率	.364	.321
累積寄与率	.364	.685

今回、関東圏の6大学に実施したデータを前回の報告書と同様に主因子法、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転による因子分析を行った結果、2因子（それぞれの因子固有値は第1因子:17.85、第2因子:1.23）が抽出された（前頁:表4）。累積寄与率は、全体の観測数に対して68.53パーセントとなった。

調査で得られたデータの分析結果から、第1因子には他者的な理由（もしくは環境要因）による阻害要因（※秋田県内データの第2因子に類似）、第2因子には自己的な理由による阻害要因（※秋田県内データの第1因子に類似）が明らかになった。（各項目内容については文末Appendix参照。）

(3) コミュニケーション教育による変化の調査

B大学におけるコミュニケーション教育による変化を次頁に示す（表5）。

各項目とも概ね上昇しているが、項目I-1~4, 10, 13, 17は順調に上昇、項目I-5, 6, 8はあまり変わらないという結果となった。またコミュニケーションへの自信も概ね順調に上昇していた。ただし第15回でも平均値3.0以下であった

表5. コミュニケーション教育による変化

I 考え方・態度・行動	当初平均	標準偏差	第11回平均	標準偏差	第15回平均	標準偏差
1 初めて話す人とも、仲良くなれる。	2.86	1.02	3.08	1.05	3.28	0.96
2 初めてではないが「友達ではない」人とも緊張せずに会話できる。	2.59	1.08	2.76	1.09	3.09	1.03
3 「たくさんの人と話したい」と思う。	3.78	1.04	3.84	1.15	4.13	1.01
4 あまり話したことのない人にも「壁」を感じることはない。	2.41	1.02	2.41	1.02	2.64	0.91
5 あまり話したことのない異性とも普通に会話できる。	3.18	1.15	2.71	1.13	2.79	1.05
6 あまり話したことのない年上の人とも普通に会話できる。	2.95	1.16	3.05	1.21	3.00	1.05
7 「第一印象が悪い人」でも偏見を持たずに会話する。	2.60	1.05	2.65	1.09	2.85	0.98
8 見た目がチャラチャラした人とも誠意を持って会話をする。	2.93	1.10	2.96	1.14	2.96	1.03
9 「自分らしい自己紹介」ができる。	2.62	1.00	2.68	1.19	2.99	0.96
10 必要なときは質問・確認をする。	3.30	0.96	3.53	1.12	3.70	0.84
11 意見を強く言う人に対しても必要があれば自分の意見を伝える。	3.25	1.01	3.34	1.27	3.41	1.01
12 大人数(グループ)でも遠慮せずに会話できる。	2.82	1.05	2.84	1.40	3.13	1.02
13 クラスの前に立って意見を言うことができる。	2.42	1.06	2.72	1.46	2.92	1.05
14 話している相手のことを考えながら話している。	3.68	0.84	3.74	1.28	3.86	0.76
15 相手の話を聞くときには、表情や態度に気をつけている。	3.85	0.84	3.88	1.30	3.96	0.76
16 周りの人のコミュニケーションをよく見ている。	3.41	1.03	3.69	1.49	3.69	0.86
17 自分のコミュニケーションのあり方について、考えている。	3.39	1.10	3.60	1.61	3.87	0.90
II コミュニケーションへの自信	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1 コミュニケーション能力全般	2.26	0.92	2.39	0.97	2.65	0.99
2 人の話をちゃんと聞くこと	3.31	1.05	3.41	1.02	3.43	1.03
3 人に自分の意見や考えを説明すること	2.65	0.98	2.76	0.97	2.94	0.99
4 人と「話のやりとり」をすること	2.78	0.92	2.98	1.02	3.18	0.98

項目としてⅠ-5, 6, 8, 9, 10, 13 が挙げられる。コミュニケーションへの自信では項目Ⅱ-1, 3 が 3.0 以下である。

考察・まとめ

(1) 出身地による違いについて

秋田出身者や秋田以外の東北・北海道出身者は「自己紹介が苦手」で初対面に壁を感じ、コミュニケーションに自信がないことが示唆された。小中高の教育でコミュニケーションや自己紹介に関する訓練を行うだけでなく「自己を表現する」「個性（自己）を認める・受け入れる」「多様性を認める」教育が必要なのかもしれない。他方でそれら出身者が相手のことを考えたり、表情や態度を気にしたりしていることも分かった。

また男女の違いとして、男性よりも女性のほうがたくさんの人と話したいが、コミュニケーションに壁を感じやすく、特に人前が苦手であることが示された。女子特有の人間関係やコミュニケーションのあり方と関係しているのかもしれない。この辺りについてはさらに詳細な調査研究が期待される。

(2) 大学設置地域による違いについて

昨年度作成した「学生による大学間交流尺度」は、秋田県内の学生より関東圏の文系学生でより適合性を持つことが示された。

また関東圏の学生では「環境要因」が第 1 因子、学生の内向き・利己的・打算的な「自己要因」が第 2 因子となっていたのに対し、秋田県内学生は「自己要因」が第 1 因子、「環境要因」が第 2 因子となっていたことから、秋田県内学生には「動機や積極性の弱さ」「後ろ向き、横並び意識」等の傾向があるのかもしれないことが示唆された。また秋田県内学生では 5 つの因子が抽出されたということは他の要因も関わっているのかもしれない。

(3) コミュニケーション教育による変化について

学生は当初、コミュニケーションに不安感や苦手意識を持っているが、席替えや自己紹介、グループワークを繰り返す経験を通じ、コミュニケーションに慣れていくことが分かった。それが「初めて話す人でも仲良くなれる」項目の得点やコミュニケーションへの自信得点の上昇につながったものと考えられる。

一方で「あまり話したことのない異性とも普通に会話できる」「あまり話したことのない年上の人でも普通に会話できる」は必ずしも上昇しなかった。男女混合で席換えを行っていたが、1 コマ 90 分の講義では十分に「腹を割る」「違いの大きい人と仲良くなる」のは難しいのかもしれない。

また例えば「大人数（グループ）の前でも遠慮せずに会話できる」は第 11 回から第 15 回にかけて伸びているが、これは第 13 回で全員の前でグループによる発表、第 15 回で全員の前で 1 人 1 人が発表した経験によるものかもしれない。

いずれにせよコミュニケーション場面において責任と役割を果たす経験が、学生の自信につながったものと推察される。学生には「半強制的に」コミュニケーションをさせることで、自信につながるものと推察される。

学生には、経験を通じたコミュニケーション理解が必要である。学生は知識やスキルが足りず、経験も少ない。だからこそ自信がなく、「友人でない他者」とのコミュニケーションの繰り返しの練習が不可欠である。またその教育内容として、学生の不安感や苦手意識に対応する必要がある。それにより、コミュニケーションの楽しさや意味、重要性を理解できるようになる。

例えば伊藤（2012）はコミュニケーション不足による早期離職に触れ、自校におけるアサーション（自分の考えを相手に伝える力）の欠如について触れている。また石川（2011）は卒業生に対する職場適応調査から必要なコミュニケーション力等を分析している。このように学生の状況に応じて、コミュニケーション教育の内容を設計することが必要である。

さらに標準偏差で見ると、第11回で増え、第15回で減る傾向が見られた。これは途中では得点の差が開き（上位と下位の習得に差が出）、最終的には差が小さくなった（下位も追いついた）ということと想定される。コミュニケーション教育で理解する・自信がつくスピードは学生により異なることを示しているのかもしれない。個別の学生に対応した、コミュニケーション教育が必要である。

サービス産業化や核家族化、地域コミュニティの崩壊、携帯電話やインターネットの普及・進展により、近年、若者が赤の他人と直接コミュニケーションを行う機会が大幅に減少している。そうした中で、学生はコミュニケーションに対する不安感や苦手意識を持っている。そうした中、学校は「若者はコミュニケーションができない」と批判するだけではなく、学校教育の中において学生の実態や課題を踏まえたコミュニケーション教育を行っていく必要があるのではないだろうか。

〈参考文献〉

- 船木幸弘・高村由莉(2013)。「対人コミュニケーション教育実践上の留意点：女子大生のコミュニケーション 2007-2012 年の様相」『人間生活学研究』20, 13-48.
- 伊藤政治 (2012) 高等学校（工業）における将来に向けたキャリア教育の在り方—専門教育の充実とコミュニケーションスキルの向上をめざして— 愛知教育大学教育実践研究科（教職大学院）修了報告論集.271-278
- 石川保志 (2011) 卒業生調査にみる本学におけるキャリア教育への示唆 筑波技術大学テクノレポート 18-2, 83-87
- 堀井俊章 (2002)。「成人期における対人不安意識の発達的变化（続報）」『山形大学紀要（教育科学）』13, 79-94.
- 松島るみ・塩見邦雄 (2002)。「対人的自己効力感と学校における対人ストレスの関係について」『日本教育心理学会総会発表論文集』44, 241.
- 岡田努 (2002)。「現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察」『性格心理学研究』10, 69-84.
- 菅原良・渡部昌平 (2014)。「地方大学における学生の大学間交流活動の阻害要因に関する研究」『日本キャリアデザイン学会第 11 回研究大会資料集』, 33-36.
- 田中まみ・春川修子(2013)。「大学におけるキャリア教育の重要性—コミュニケーション演習授業を通じた人間教育の実践報告—」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』43, 65-77.
- 渡部昌平・菅原良(2014)。「大学間交流を活発化するための探索的研究—学生に対するヒアリング調査から—」『秋田県立大学総合科学研究彙報』15, 95-96.
- 渡部昌平 (2014)。「キャリア教育におけるコミュニケーション教育の内容を考える」『東北・北海道地区高等・共通教育研究会 予稿集』
- 山田雅子 (2012)。「コミュニケーション教育の課題—日本人女子学生の評価を踏まえて—」『埼玉女子短期大学研究紀要』26, 135-152.
- 大和里美 (2010)。「キャリア教育における参加型授業の有効性に関する検討：テキストマイニングによる効果分析」『太成学院大学紀要』12, 139-149.

Appendix 学生による大学間交流尺度（※交流を阻害し得る要因を規定）

(Scale of Inter-university Exchange by the Student)

SIE1	必要性が感じられない	SIE15	合同授業がない
SIE2	共有する情報が少ない	SIE16	他大学に興味がない
SIE3	大学間の距離が遠い	SIE17	大学が少ない
SIE4	大学が交流の場を作ってくれない	SIE18	費用がかかる
SIE5	いまの友人関係で十分	SIE19	集まる場所がない
SIE6	交流しようとする雰囲気がない	SIE20	普段の生活が忙しい
SIE7	自分の専門分野とは関係ない	SIE21	交流イベントがない
SIE8	意義が見出せない	SIE22	アルバイトが忙しい
SIE9	交流するのがわずらわしい	SIE23	目的を見つけるのが難しい
SIE10	大学のサポートが不足している	SIE24	学生のコミュニケーション能力が低い
SIE11	交流の方法がわからない	SIE25	他大学をよく知らない
SIE12	動機や意欲が不足している	SIE26	他人との交流が苦手
SIE13	学力差が大きい	SIE27	メリットが感じられない
SIE14	きっかけがない		